九州ルーテル学院大学

Teaching Portfolio

2020

所　　属：　　人文学科　こども専攻　保育コース

名　　前：　　井﨑美代

作成日：2020 年 10 月 16 日

九州ルーテル学院大学　ティーチング・ポートフォリオ

教員氏名：　井﨑美代
所属：人文学部　人文学科　こども専攻　保育コース

１．はじめに

学生が自身の学修過程や各種の学修成果を収集・記録するための学修ポートフォリオを作成するように、教員が自らの授業や指導といった教育面についての業績や努力を記録するティーチング・ポートフォリオ（ＴＰ）の作成が私立大学等改革総合支援事業タイプ１「教育の質的転換」の設問においても求められている。

そこで今回このティーチング・ポートフォリオを作成し、自分なりの教育活動の改善や成果を記録として提示し、大学が社会に対して教育活動を説明していくことができるよう取り組んだ。

２．教育の責任

1993 年に九州ルーテル学院大学の前身である九州女学院短期大学の助手として体育関連科目を担当する前は、熊本県立高等高校の保健体育教諭として 5 年間として勤務していたことを合わせると教員生活も 33 年目を迎えている。公務員を退職して本学に勤務することになってからは 28 年目となる。この間に教員待遇研究員、人文学部兼担講師など短大から 4 年制大学への改組に伴う所属の変更を重ね、現在は九州ルーテル学院大学人文学部人文学科こども専攻保育コースに所属し、保育者養成に関する専門科目と全学生を対象とした共通教育科目の担当をしている。2020 年度の担当科目は前後期合わせて 10 科目 15 コマである。

また、2018 年度から 2019 年度の 2 年間は、学生支援センター長として学生生活全般、キャリアサポート等幅広く支援するために尽力した。

2.1. 授業科目の担当

2018 年～2020 年度の 3 年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
保育内容（健康）	2018-2020 前期	35 名前後	こども専攻保育コース専門必修
レクリエーション論	2018-2020 前期	35 名前後	共通教育選択
体育（幼）	2018-2020 後期	35 名前後	こども専攻専門必修

体育（小）	2018-2020 後期	50 名前後	こども専攻専門必修
健康科学論	2018-2020 後期	150 名前後	共通教育選択
保育実践演習	2018-2019 前期、2020 後期	35 名前後	こども専攻専門選択
フレッシュマン・ゼミ	2019 前期	34 名	共通教育必修
チャイルドケア・ゼミ	2018-2020 後期	35 名前後	こども専攻専門選択
キャリア・デザインⅠ	2018-2019 後期	平均 95 人(65･126)	共通教育選択
キャリア・デザインⅡ	2018-2019 前期	平均 24 人 (29・19)	共通教育選択
スポーツ実技（レクリエーション）	2018-2019 前期	10 名前後	共通教育選択
スポーツ実技（卓球）	2020 後期	17 名	共通教育選択
保育内容の理解と方法（保育の表現技術）	2020 通年	35 名前後	こども専攻専門選択
特別研究	2018-2020 後期	6 名前後	こども専攻専門必修
卒業研究	2018-2020 通年	6 名前後	こども専攻専門必修

具体的には、保育者養成校の教員として保育士資格や幼稚園教諭一種免許状取得における健康、運動遊びに関する必修科目および教職必修科目としての「健康科学論」、資格必修科目としての「スポーツ実技」等を担当している。2020 年度については、前期に実技科目を実施することができなかったため、開講時期を後期に変更して実施した。

主要担当科目については以下の通りである。

＜主要担当科目＞

「体育」

保育士資格、幼稚園教諭一種免許状および小学校教諭一種免許状取得のための必修科目として開講されている科目である。幼稚園教育要領、小学校体育の学習指導要領を総合的に踏まえ、対象者を遊びや運動に親しませるために求められる、指導者としての資質や能力について学び、理論と実践の両側面から、幼児～児童を対象とした運動遊びと体育学習指導の発展的展開について学習を進める。

本学が「少人数教育」を特色として掲げていること、また、演習（実践）科目の充実を図るために、保育者養成課程（34 名）と小学校教員養成課程別（51 名）別に、それぞれを 2 クラスに分けて実施し、1 クラスの受講人数は保育者養成課程で 16 名と 18 名、小学校教員養成課程では 25 名と 26 名という少人数による授業となっている。

「保育内容（健康）」

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育･保育要領における領域

「健康」を踏まえ、保育者として理解しておきたい領域「健康」の内容について学修することを目的として開講した科目である。具体的には、乳幼児の健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うというねらいを達成するために、乳幼児の発達特性と基本的生活習慣及び健康についての基本的な事柄や子どもを取り巻く状況について学修し、保育者としての資質を養うことを内容としている。

2020 年度はオンラインでの授業から対面授業になった科目であるが、コロナ禍による授業の制約を受けることになり、演習科目でありながらペアワーク、グループワークを実施することができなかったため、課題として紙媒体にまとめたものを発表という形ではなく、見せ合う方法に変更した。結果的には、他学生の考えや、課題のまとめ方等を学ぶ機会にはなったようで、授業の展開は変更することにはなったが新たな学びにつながった。

「健康科学論」

あらゆる活動を支える基盤としての「健康」について認識を深め、生涯を通じて健康な生活を維持していく資質を高める。また、自分のからだやその身体活動について理解を深め、活力ある生き方を体現するための学びを深める科目として開講している科目である。2 人でのオムニバス（非常勤 5 回）で実施している。

特に 2020 年度は 50 人以上の講義に関しては対面授業ではなくオンライン授業をすることになったため、150 名の学生を対象とした課題の評価作業に時間を要している。加えて、これまで対面での授業では使用できた教材がオンラインでは使用できないものがあるために授業内容の変更をして対応している。

学部での教育以外の教育実践は以下のようなものがある。

＜非常勤講師＞

・熊本大学教養科目「体育・スポーツ科学 a 」（～2020 年度）

非常勤としての授業担当 15 年目となった。2019 年度からはターム制が導入され、8 コマずつ第 1 タームおよび第 2 タームを担当している。2020 年は遠隔授業での実施となり、66 名の評価を担当した。

2.2. 教育組織運営

2018 年度から 2019 年度の 2 年間は、学生支援センター長として学生生活全般、キャリアサポート等幅広く支援するために尽力した。特に組織としてのみ存在し、一度も学生の選出も実施もされていなかった「student　voice 委員会」を実働させ、2 年間の任期中 2 度のメンバーを選出し、委員会を開催して学生代表の意見を聞く機会を設けた。委員会の記録（内容）については、教授会で報告することになっているため、学生の声を届けるきっかけを提供することができた。

３．教育の理念

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には他者に感謝し、他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を４年間で行うことが本学の教育理念であると考える。

3.1. 理念１　「苦手を克服し、得意を伸ばす」ことを常に発信し、取り組みを促す

保育者養成校としての開設当時から、グループワークを通しての学生の学びの充実は評価できるところである。ただ、「それぞれの得意を活かし、グループとしての成長」を実感できることは多いが、それはグループワークでそれぞれが苦手を補い、得意を発揮しているものの、自分の苦手に取り組み克服しているわけではないこと、グループワークを通してそれを個人の技術向上につなげる努力をしてほしいということを絶えず伝えるように意識している。また、オープンキャンパス等で保育コースの紹介を担当する際には、高校生にも伝えるようにしている。

3.2 理念２　実践を通して、現場等で活用できる保育・幼児（児童）教育の専門的知識（技能）を身につける

学びを通した専門的知識及び技能の習得を重視することはもちろんであるが、特に「人見知りなので話しかけてください」と自己紹介をする保育者（教育者）希望の学生が見受けられることもあり、恥ずかしがらずに実践をすることを通して「知っているとできるは違う」というような課題をさらに認識し、4 年間を通して成長するような学生を育成することを目指している。

3.3. 理念３　科目での学びで完結するのではなく、学びを総合的に関連付け、保育コース教員で協力しながら取り組む

保育コース開設当初は、１年次の「フレッシュマン・ゼミ」、「チャイルドケア・ゼミ」、２年次の「保育内容の理解と方法（保育の表現技術）」、３年次の「保育実践演習」はコース教員全員で担当していた科目である。それぞれの担当科目が増加したこともあり、現在では科目責任者とアドバイザー学年担当者を中心に担当することに変更してきてはいるものの、全員で協力しながら、４年間を通して学びを総合的に関連付けさせながら学生を支援するよう意識している。

具体的には、それまでの保育に関する学び等を踏まえ、保育士（者）としての必要な知識技能を習得したことを確認することを目的とした科目として開講されている「保育実践演習」は、「保育内容の理解と方法（保育の表現技術）」、保育コース夏期合宿、学びの集大成として実施する「こどもフェスティバル」（3 年次 11 月）と関連付けティームティーチング

により実施している。ただし、残念ながら 2020 年度はこどもフェスティバルを実施することができなかった。

４．教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法をとっている。

４.1.　実践（グループワークや模擬授業）を通しての学び

学生が自発的に授業に取り組めるようにするため、「演習」として実施している授業に関しては、事前学習での学びを掲示による提示や発表等を通したうえでグループワークや全体での実践につなげるようにしている。(「体育」、「保育内容（健康)」、「レクリエーション論」等)

特に、「体育」においては、模擬授業（保育）の実践方法として、実践者以外の学生は、①参加者（観察者）としての評価、②保育者（教育者）としての評価を実践者ごとに記名のうえ提出する。記名をさせるのは責任を持って評価をするためである。その後、原本は保存したうえで、コピーしたものを実践者別に分類し、加えて評価者名はあえて外した評価表を実践者にフィードバックする。

また、模擬授業（保育）の振り返りのために、課題としてレポートの提出を課している。①計画、②実践、③評価（自己評価、他の学生からの評価参考を参考に)、④他の学生からの学び（他の学生の実践を通して学んだこと）をまとめることになっている。学生には周知したうえで、提出されたレポートは希望する学生への閲覧可能とし、他の学生の提出物からの学びができるようにしている。

４.2.　視覚的情報を通しての学びの振り返りができる取り組み

特に「体育」の授業では、授業計画後半において、１人１０分程度の模擬授業（保育）を実施している。実践をビデオ撮影し、希望する実践者には本人のデータのみをフィードバックしている。また、実践の導入として、過去の実践者のビデオを本人の了解を取ったうえで見せ、授業実践の参考にすることとしている。

新たに、2018 年度に研究費で購入した頭部に装着できるビデオレコーダーを使用して保育者（教育者）目線での画像の取集にも試みようとしたが、実践者である学生が「装着に時間がかかる」、「1 台しかないため対応しにくい」と不評だったこともあり、2019 年度に追加購入して準備したが、結果的には「実践に集中できない」「重いため装着したくない」と装着しての実践を希望する学生がいなかったため、新たな取り組みについてはうまくいかなかった。

４.3.　経験者および現場からの学び

卒業生等からの現場での体験を通した声を、授業等を通してできるだけ届けるよう意識

している。

授業としては「チャイルドケア・ゼミ」において、現場の先生方や先輩からの話を通して今後の学びの見通しを１年次生に持ってもらうことを意図して実施している。

また、現場からの学びとしては、ボランティアまたは観察者として付属保育園または併設幼稚園の運動会という行事における①園児（児童）の活動の様子、②保育者（教育者）の動き（プログラム進行上、子どもとのかかわりなど）の視点で課題（レポート）への取り組みを通した学びを深めることを心掛けている。ただし、残念ながら 2020 年度はボランティアとしての参加はコロナ禍における感染拡大防止の観点から中止となったため、観察による学びのみとなっている。

５．教育改善のための努力

５.1.　改善努力１　授業評価アンケートと授業改善報告書

各学期終わりに実施されている学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善すべきと思われることは授業改善報告書に記載し、翌年度に改善するように心がけている。

ただし、授業初めにあえて説明を加えることもある。例えば、同じ授業における授業後のコメントでも「とても分かりやすかった。」、「高校までの学びの復習ができてよかった。」と評価する学生がいる一方で、「難しくて理解できなかった」というように、特に受講者数の多い科目においては、これまでの学びや知識の違いなどに差がある可能性が高く、授業の評価にも差が出やすいということなどである。

2020 年度はコロナ感染拡大防止の観点から、授業形態等が制限されたことにより、授業内容も必然的に変更することとなった。なかには「演習科目で演習的内容が実施できないのであればこの科目を開講する意味はあったのか」というような厳しいコメントも見られた。この点については年度途中からの変更でもあったため、個人的な努力では如何ともしがたく、次年度に向けてはどのような条件の下で授業を実施できるかにもよるが、改善に向けた工夫を試みたいと考えている。

５.2. 改善努力２　卒業生や保育現場からの情報収集

卒業後１年目の夏に研修会を実施する「リカレント教育」や本学で開講している「免許更新講習」を通して、卒業生の状況を見聞きすることはできているが、その他の卒業生の動向等についてはなかなか情報を収集できていないのが実状である。卒業時にも離職時や結婚による名前の変更等、保育コースのどの教員にでも構わないから連絡をしてほしいということは伝えてはいるものの、実際には報告をしてくれている状況であるとは言い難く、縦と横のネットワークの弱さを実感するところであり、この点に関する改善は引き続き必要であると考える。

また、保育現場の生の声を学生に届けることを継続していくためにも、さらに卒業生や保育現場とのかかわりを密にすることを心掛けたい。

なお、2020 年度は例年通りのリカレント教育は実施できていない。何らかの形で実施することができないかと検討しているところでもあり、変更してでも実施していくことに尽力したい。

７． 今後の教育に関する課題と目標

2020 年度にコロナ禍における授業の形態および内容の変更は単年度における変更で済むのか、今後継続することを想定しながら取り組んでいく必要があるかによっても、今後の課題は変わってくると思われる。

・実践（グループワークや模擬授業）を通しての学び

理念およびその理論を実現するための教育の方法でも触れているが、現場等で活用できる保育・幼児（児童）教育の専門的知識（技能）を身につけることを意識し、特に実践（グループワークや模擬授業）を通しての学びについては重視して取り組んできた。しかし、2020 年度は感染症拡大防止の観点から、演習科目においても「ペアワークやグループワークの禁止」を掲げられ、本来実施したい内容が取り扱えず、方法としても制約された中で自分なりには工夫して実施してきたつもりであるが、科目としての目標や特性を踏まえた授業は十分な対応ができているとは言えない状況であった。実施方法等に制約がある中での実践（演習）を今後も実施しなければならない可能性を想定し、現場での実践の状況等を踏まえながら、再度内容と方法については検討することが必要であると考える。

・視覚的情報を通しての学びの振り返りができる取り組み

特に保育コースの学生に「自分の実践している姿を映像で見る」、「発している声を聞く」ことを恥ずかしがる、嫌がる学生が多く見られる。いずれ人の前に立ち、人から見られる、評価されることにも慣れる必要があることを指導し、主観的にではなく客観的にも自分自身の実践の振り返りができるよう促していきたい。

・経験者および現場からの学び

すでに記載しているように、卒業後の状況把握があまりできていないのが現状である。卒業生とどのように連携し、卒業生を支えつつ、現場の声を活かした教育につなげていくか具体的に方法を構築していきたい。

8. 参考資料

（1）担当科目シラバス

（2）授業評価アンケート結果　　別紙資料参照